

森鷗外生誕150年記念 鷗外サミット

ベルリン森鷗外記念館副館長



ベアーテ・ヴォンデさん

1954年生まれ。フンボルト大学日本学科卒業後、早稲田大学に留学。84年のベルリン森鷗外記念館設立以来、多種多様な活動を通して鷗外の紹介に努める。

フンボルト大学は、明治時代の日本のエリートたちの留学先でした。その歴史的な理由から、ベルリン森鷗外記念館は、同大学の施設として存在しています。

世界文学の大家の多くが、ドイツ文学にかなり大きな影響を与えました。でも、ロシアの作家のゴーリキー、ツルゲーネフ、チェーホフ、アメリカの作家のプロウスキー、インドの詩人のタゴール、フィリピン

の国民的英雄のホセ・リサル、彼らの記念館はドイツにはありません。さらに言えば、細菌学の祖といわれるロベルト・コッホも、一九〇八年にコッホが来日したときの日本の資料は、今展示されずに眠ったままです。ベルリンに森鷗外記念館が存在することの意味の大きさを、まず申し上げたいと思います。

物事を忘れやすい私たちにあって、記念日を祝うこと、記念館を持つことはとても大切です。「記念日」は過去の作家が再び注目を浴びる日、「記念館」は常時訪ねることができ、その作家についてより詳しく知る機会を与える場所として大切なものです。それは過去の人を記憶し続け、その人の知恵を現在に、また未来に生かすことができるからです。「これから」のためには、「これまで」が必要です。

記念日や記念館は、個人的な経験の場でもあります。過去の人が自分ともかかわりがあることを発見し、

興味深い研究 今でも続々と

過去の自分を振り返りながら、自分を探していく。ベルリンの鷗外記念館を訪れた人は、日本人としてのアイデンティティー（自己の存在を証明すること）を思い返すかもしれない。その意味では、来館者の数だけ鷗外観があります。

言つまでもなく、学問的な背景のない記念館に価値はありません。鷗外に関する興味深い研究が今でも日々発表されています。そして、加藤周一は「鷗外は、近代文化が生み出した難問をすべて取り上げた」と書いています。鷗外が投げかけた難問はまだほとんど解決されていません。私たちの記念館は創設されてから二十八年たちましたが、展示の材料や着想は、少なくとも今後五十年は種切れにならないといつていいです。

私たちの活動は、博物館的な施設としての展示だけにとどまりません。日本とドイツのさまざまな組織の仲介者として、また社会に開かれた学問の窓として活動してきました。これらの活動を私たちは自負しています。

二〇一四年は記念館の開館二十周年です。鷗外作品のグローバル（世界的）な普及、鷗外研究のネットワーク形成、そしてとりわけ若者が、グローバル時代の潮流に対する鷗外の鋭敏な感覚に学べるよう、記念館の安定的な存続に皆さまのご支援、ご協力をいただければ幸いです。